

# 「道徳」と「象徴表現」の有効性について

—芥川龍之介とエジプトの作家カーメル・エルキラーニーの童話の比較を通して—

シリーン・エルモタセム

## EFFECTIVENESS OF “MORALITY” AND “SYMBOLIC EXPRESSION” —THROUGH A COMPARISON OF THE FAIRYTALES OF RYUNOSUKE AKUTAGAWA AND EGYPTIAN WRITER KAMEL ELKILANY

Shereen Elmoutasm

### 0. はじめに

児童文学は、日本とアラブの近代文学の一分野であり、言葉を使用する芸術表現の一形態である。世界の児童文学のなかで、日本の児童文学は、まったく独特、異質なものである。児童文学は、子供たちに対して、自分の生活に関する様々な疑問を解決する機会を提供する。子供たちは、自分の身の回りの環境を発見する必要があるため、児童に動植物や様々な情報を紹介することは、児童文学者の大事な役割と言える。彼らは象徴や描写、幻想などを使用して子供に情報を提供し、子供の世界を広げようとする。

芥川龍之介は、日本の小説家である。彼の作品の多くは短編である。また、短編小説の先駆者とみなされ、いまだに、日本で彼の作品はよく読まれている。芥川は東京で1892年に生まれ、1927年に死亡した。芥川は幼い時から古典に興味を持ち、また、森鷗外や夏目漱石の作品を読んだ。1916年には主著である『鼻』を出版した。

文学は国際的に扱うべきということに考えが及んだ芥川作品には西洋文化と古典文化の影響がみられる。彼は児童向けの作品も多く書いた。子供のために役に立つ作品を著し、その作品の特徴は、経験や象徴や感情など豊富であった。

一方、カーメル・エルキラーニーは1897年にエジプトに生まれ、彼は一日の殆どを一人で過ごすことが多かったので、本を読む機会が多くなり、アラブ人の優れた詩人達による20,000以上の詩を保存し最初は新聞社で働き、文学と芸術を専攻し、自宅では友人たちのために児童文学の講習を開催した。1918年には、現代演劇会の会長を務め、1922年発行の雑誌の編集長になり、1925年から1932年の間にはアラビア語文学協会の長も務めた。また、子供たちにラジオで読み聞かせもした。それから1929年には自らの信念を実現し、児童文学館を作った。

エルキラーニーの名前は児童文学と密接に結びついている。彼の童話は、子供の教育、教養、礼儀正しさを重んじ、あらゆるものを簡潔に説明し、様々な情報を子供に面白く紹介した。更に、児童文学として50冊の作品を作り、また他の文学作品にも手を広げ、パレスチナや

レバノン、シリアを旅した印象を綴った『近隣諸国の回顧録』という紀行文学も残した。1927年以降、彼はまた児童文学の執筆に関心を向け、この分野の先駆者になり、児童文学として最初の作品『海のシンドバッド』を出版し、その後同じ分野の作品を大量に作った。エルキラーニは1959年に亡くなった。

芥川龍之介とカーメル・エルキラーニは、同じ時代に生まれ、芥川龍之介はその生涯の中で数編の童話を残しているがカーメル・エルキラーニはエジプト文学に特異な世界を切り開いた詩人、童話作家である。

この二人の作品がこれほど大勢の読者を獲得できた魅力は、まず面白いという感想のほか、恐らく作品の主人公のイメージが頭にこびりついてなかなか忘れられないのであろう。

本論では日本の作家、芥川龍之介とエジプトの作家、カーメル・エルキラーニの短編『蜘蛛の糸』と『命の木』を中心に二人の作者の童話における象徴表現を通して道徳的な価値観の違いを明らかにする。また、芥川龍之介とカーメル・エルキラーニの童話における象徴表現を通して道徳的な価値観について、アラビア語でも日本語でも二人の文学者を比較する研究は見当たらないからである。この論文における象徴とは、アブデル・タワブ・ユセーフ（1995）による「象徴は、象徴自体を意図しているのではなく、訓戒や教訓を直接的な方法を使わず、それを避けて、象徴や暗示を使うため、児童文学に役に立つ良い結果を出すことを意図している」とする。<sup>1)</sup>

## 1. 芥川龍之介の童話

芥川の児童文学作品は日本の近代児童文学史上に残る名作であり、その作家生涯の中で数編童話を残している。

滑川道夫は「芥川龍之介の児童文学」（1958.8）において、芥川の児童文学の特質は「人間性を発掘し続ける点に求められる」と論じている。<sup>2)</sup>

芥川文学には人間心理の描写に優れている作品が多いことは周知の通りである。彼の多くの作品の中には、意外にも子供向けの、人間の純粋さや無垢な一面を描く作品もあり、大人向けの世界と違う面を呈している。芥川の児童文学を書いた時期、1918年7月から1923年8月までの5年間、すなわち芥川の中期と呼ばれる時期に書かれてもいる。

芥川龍之介の生涯においての166篇に至る短編小説のうち、『戯作三昧』（1918）や『地獄変』（1919）それに『沼地』（1920）などに代表される芸術至上主義を信奉する短編小説があるかと思えば、『羅生門』（1915）と『鼻』（1916）のように日本古典からストーリーを借用して日本の大正時代を生きている人間たちのエゴイズムを批判する小説もあり、『河童』のように日本の大正時代を生きているインテリたちの心の葛藤や悩みを書いている小説もある。

芥川龍之介の短編小説は、歴史題材の作品でも現代題材の作品でも、上品な言葉、きめが細かい心理描写、巧妙な分布で彼の独特な芸術風格を表す。彼の短編小説は題材が幅広く、構想も巧妙で、思想内容も深刻である。それらは、芸術の風格を有した、清新なものであり、その技巧には深い造詣が見られる。主人公の心理描写を通して、人間の複雑で込み入って

る思想意識を反映する。

越智良二は「芥川童話の展開をめぐって」(1989.12)において、尾崎瑞恵の論「芥川龍之介の童話」(1970.06)を踏まえ、同様に「蜘蛛の糸」、「魔術」、「杜子春」、「白」の四作取り上げて、「単なる教訓や常識道徳の押し付けには止まらなかった。エゴイズム克服を願う彼の憧憬も真実であろうし、その陰に深まってゆく悲哀も彼の真実だろう」と述べている。<sup>3)、4)</sup>

芥川童話においては、象徴表現が作品の主題に深く関わっていることが多い。それは物語における筋の展開の外側で、様々なイメージを形成する。象徴表現やそれらが創出するイメージは、作品の主題を補完したり、短編集の背後に別のイメージを付与したりすることで、作品により豊かな意味を持たせたり、言外に形而上的な意味を付与したりもする。

### 1-1. 『蜘蛛の糸』

武藤清吾著『芥川龍之介の童話』(2014)において「蜘蛛の糸」は三章から成っており、一章と三章、お釈迦様がいる極楽の様子、二章カンダタが蠢く血の池地獄が、それぞれ語りによって語られている。「蜘蛛の糸」で表現されるのは極楽と地獄の様子であり、そこで苦しみ手足動かすカンダタであると述べられている。<sup>5)</sup>

極楽や地獄のことを日常会話で話すことは、日本人にとって普通のことではないことを考えれば『蜘蛛の糸』は、名作である。短い作品だが、この作品によって芥川龍之介は「新技巧派」とよばれるようになった。また、人間のエゴイズムを端的に表現しており、小学生にもその主題は理解出来るであろうし、大人になってから読んでも、無駄の無い簡潔な文章の流れが、非常に素晴らしく感じられる。

更にこの作品は非常に単純な構成の短編である。主な登場人物は御釈迦様とカンダタの二人のみで、時間の経過も朝から昼前の非常に短い間の出来事である。しかし、短い中にも運命のはかなさや、人間の浅ましが凝縮されており、読者に訴えかける力の非常に強い作品であると言えるだろう。

陀多と云う男は、人を殺したり家に火をつけたり、いろいろ悪事を働いた大泥坊でございますが、それでもたった一つ、善い事を致した覚えがございます。と申しますのは、ある時この男が深い林の中を通りますと、小さな蜘蛛が一匹、路ばたを這って行くのが見えました。

『蜘蛛の糸』には泥棒のカンダタ、お釈迦様、蜘蛛、罪人が登場する。その中でカンダタと罪人は地獄にいて、お釈迦様と蜘蛛は極楽にいる。この作品は生前悪事の限りを尽くしたカンダタと言う人間の話だ。彼は生きている間一つだけ善良な行いをしたことがあったが、今は地獄で苦しんでいる。

そこで陀多は早速足を挙げて、踏み殺そうと致しましたが、「いや、いや、これも小さいながら、命のあるものに違いない。その命を無暗むやみにとると云う事は、いくら何でも可哀そうだ。」と、こう急に思い返して、とうとうその蜘蛛を殺さずに助けてやったからでございます。

カンダタは殺人や放火などいろいろな悪事を重ね、地獄に落ちていることは当然だが、一匹の蜘蛛を踏み殺さなかったことでお釈迦様はカンダタに地獄から天国に抜け出す機会を与

えたのだ。この程度を善行と言えど誰でも一度は行っている。だからお釈迦様は地獄のすべての罪人も天国に上げられる機会を与えようとしたのではないだろうか。

『蜘蛛の糸』は芥川龍之介が子供向けに書いたこともあり、子供たちに伝えたい内容であったと推測できる。また子供たちは、登場人物なら誰に感情移入をするのだろう。それは、やはり主人公のカンダタではないだろうか。

主人公のカンダタは無慈悲な男だろうか。『現代児童文学論』の片岡良一によると「蜘蛛の糸」の中で最初に注意されねばならないことは、主人公のカンダタが無慈悲なばかりの、醜惡一途な人間として描かれていることではないという述べられている。<sup>6)</sup>

『蜘蛛の糸』ではカンダタは「蜘蛛を助けた」が彼の悪事に比べてこんな僅かな善良な心は細い蜘蛛の糸で十分であるのだろう。もし、もっと多くの善事を積んでいたらお釈迦様が太い縄を地獄へ垂らしたかもしれない。

そこでカンダタは大きな声を出して、「これ、罪人ども。この蜘蛛の糸はこちらにはその蜘蛛の糸は己のものだぞ。お前たちは一体誰に尋いて、上って来た。下りろ。下りろ。」と喚きました。

その途端でございます。今まで何ともなかった蜘蛛の糸が急にカンダタのぶら下さっている所からぷつりと音を立てて断れました。ですから、カンダタは もたまりません。あっと云う間もなく風を切って、独楽のようにくるくる回りながら、見る 見る中に暗の底へ、まっさかさまに落ちてしまいました。

この物語で重要な点は、蜘蛛の糸はなぜ切れたのかである。「下りろ。下りろ。」と発言したとき蜘蛛の糸は切れた。蜘蛛の糸が弱いから切れたのではなく、自分ばかりが地獄から抜け出せばいいとする「自己中心的で無慈悲な心」になったからだと考えられる。一つの細くて切れそうな蜘蛛の糸は極楽と地獄という二つの対極した世界を結んでいる。人間が自分の「善」で「悪」を克服できたら、極楽世界への希望があり、できなかったら、地獄へ落ちるしかないという業を象徴していると言えるかもしれない。

蜘蛛は作品の展開や登場人物の性格造形と緊密な関係がある。その作品の表題は動物形象という特徴が注目されている。とりわけ注目に値するのは、この小説において、動物は人間の宿命に他ならないことである。

蜘蛛はカンダタが一度だけ地獄から抜け出すことができる運命を象徴していた。その蜘蛛を助けたことはカンダタにとって生前唯一善行の証だった。この蜘蛛の糸はカンダタの善行を象徴すると考えられる。カンダタは蜘蛛を助けたが、彼の悪行に比べるとそんな僅かな善良な心は細い蜘蛛の糸で十分であると思う。つまりそのカンダタは自分の悪行に反省せず、以前と同じように振る舞い、自分の悪に気付かなかったのである。それでは、蜘蛛の糸は人間のエゴイズムについて書かれている。主人公カンダタはお釈迦様からかけられた慈悲を自分自身のエゴイズムによって台無しにした。そして、カンダタのエゴイズムは他の罪人に対して無慈悲なものでもあった。

『蜘蛛の糸』の主旨は、大正期に隆盛した理想主義といった一時代のカテゴリーにとどまることなく、教育の現場はもとより、現代社会そのものにより生かされてくるものである。<sup>7)</sup>



この作品では、蜘蛛の糸は自分の物だ、と言った途端に糸は切れ、再び地獄に落ちてしまった。そこから蜘蛛の糸はカンダタの善の心を象徴していると感じる。カンダタは悪いことをしたから、悪いことが起きたのだという因果応報的な価値観が影響しているとも言える。「蜘蛛の糸」には有益な教訓がある。蜘蛛の糸切れるシーンから大事な教訓を取り出せば「自分の利益を優先し、他者を蹴落とせば、その行為が自分に返ってくる」ということである。即ち、「悪いことをすれば必ず自分に返ってくる」ということである。そういうわけで、この糸が切れたのはカンダタの自己中心的、利己的な行動の結果を象徴していると考えられる。

## 2. カーメル・エルキラーニの童話

初めのうち、エルキラーニは数多くの文学書を執筆した。その後児童文学に目を向けて道を極め、物語や世界中の伝説をアラビア語に翻訳して行った。多くのインドの伝説やシェイクスピアの小説を紹介したり、世界中の小説を数多く翻訳した。初の子供向けの物語「海のシンドバッド」は1933年に書き上げ、また別の作品「アラジンと魔法のランプ」も執筆した。

エルキラーニの書いた物語の世界に入ると、何十人もの子供たちが彼を囲み、自らの認識を広げる話を聞き、「アリババと40人の盗賊」に何が起こったかを聞く子もいれば、ほかの子供たちは新たなことを学ばせてくれる逸話をもっと聞きたいと、わくわくと喜んだという。そして、彼は新しい物語「千一夜物語」の中から「シェヘラザード」を語ってその夜を終えた。カーメル・アル・キラーニ自身が、子供たちが豊かな想像力を満たすために十分なほど、多くの発見をさせてくれる、図書館のような存在であると言えるのではないか。

また、彼は詩を書いたが、詩句や詩文はきわめて詩的であり、それらは彼の作品の中で互いにまじりあっていた。彼は慎重に、子供が芸術を通じて知識を得られるようにした。また、子供に良質の文学や高貴な美徳、善良な行動を教えた。彼は暗黙のうちにそうしたいと熱望していたが、明示的にこれ見よがしに文章に書き表すということはしなかったと言われている。

アハマド・ザラットは、エルキラーニについてこう語っている。「彼はアラブの伝説や歴史文学、児童文学の先駆者だ。外国文学に影響を受け、それを取り入れたことに加え、彼の詩もまた見逃すことのできないものだ。詩を書くとき、彼は自然の美しさを取り入れた。」<sup>8)</sup>

エルキラーニの作品は、文学的な絵のようなものであり、そのすべての絵のもとに物語のタイトルがあると言える。というのは、そのような絵は比喻で満ちた経験の集まりであり、暗示に満ちた象徴的な形で覆われていると思われるからである。

### 2-1. 『命の木』

物語の主人公であるユースフが病気の母親のために山に行き木の下で薬草を持って帰るといふ大変な旅の始まりに、動物の世界で象徴的なキャラクター（動物を使った象徴的キャラクター）が登場する。例えば、ユースフは網の罠にかかり全く動けなくなっていたカラスと出会い、すぐに駆け寄って罠を解いて自由にしてやった。その結果、カラスは大変喜び、ユー

スフに感謝して「恩返しをします」と言ったが、ユースフはその言葉の意図を理解せず、自分の性格通りに振舞い、カラスを助けた見返りを期待することなく自分の旅を続けた。また、ユースフが休もうとして座った時、キツネから逃げてきた雄鶏と出会う。キツネは雄鶏を食べようとして追いかけて、もう少しで雄鶏を捕まえそうだったが、ユースフのほうがキツネより速く雄鶏を抱きかかえ、彼の後ろに隠してやった。ユースフは雄鶏の命を救うことになり、雄鶏は喜び、ユースフに感謝してカラスと同じ言葉を繰り返した。しかしユースフは見返りを期待してはいなかったため、同じように旅を続けた。彼の関心は木にたどり着くことだけであった。そして、長い距離を進んだ後、ユースフは蛇に食われそうになっているカエルに出会い、勇気を出して蛇を倒しカエルの命を救った。カエルは助けてもらったことを喜び、カラスや雄鶏と同じ言葉を繰り返し、ユースフに感謝した。

カラス、雄鶏、カエルの役割はここではまだ終わらない。ユースフは山を目指して旅を続けるが、様々な問題に直面するとそれぞれの三匹の動物たちは助けてもらった。

雄鶏は「あなたが助けを求めているのを聞いたので、助けるために駆け付けました。なぜならあなたは私の命の恩人だからです。私はあなたに恩返しをするために来ました。無事に川の対岸にお連れしますので私の背に乗ってください」と言った。

カラスは「勇気ある方よ、私がよいことをしてあげます。あなたは私の命の恩人なので、恩返しをすると約束しました。今、その約束を果たし、問題を解決します。私は森のすべての鳥や動物の狩りに責任があります。あなたは狼に食べ物をあげることができます」と言った。

カエルは「あなたは私の命を救ってくれました。なので、あなたの命を救うために私はできる限り頑張ります。誰かにいいことをすると、いいことが返ってきます！情けは人の為ならず」と言った。

ユースフは雄鶏の背中に乗って無事に川の向こう岸に着くことができた。これが雄鶏からの恩返しであった。そしてカラスはユースフのために森のすべての鳥や動物の狩りをするを手伝ってこれによって、ユースフは狼の課した条件に合うことができ、無事に深い穴を渡ることができた。それからカエルは大量の魚とクジラを捕まえ、これでユースフは目的に到達するために猫が課した巨大な問題を解決することができた。

これらの三匹の動物たちは、二つの象徴的側面を担っていると考えらる。一つ目は、物語の二章で助けを必要としている場面にみられる。ここでは、自身が問題に直面しているにもかかわらず動物を助けることの重要性を示す象徴がある。二つ目の象徴的側面は、物語の五章・六章でそれらの動物たちが二回目に登場するシーンで現れる。その際には、善い行いの報いとは大きなものであり、だれかを助けることは価値があるということを示している。

このようなことから、この物語における動物界のキャラクターが、象徴的な様々なサインや示唆に満ちているということがわかる。こうした他者助けや恩返し of 行考というのは、友人を幸せにする結果となり自らの、夢をかなえ、目的に到達する一つの原因となる。

### 3. 芥川の『蜘蛛の糸』とエルキラーニの『命の木』の比較

#### 3-1. 芥川の『蜘蛛の糸』

『蜘蛛の糸』は芥川が常に冷静な傍観者として、理性的な目で人間性、人間の残酷な心と醜い社会を見て、現実を鋭利な知力で独自の解釈を加えて鮮明な小説を書いたと言える。芥川はこの小説の中で人間の本性の「悪」を見抜いたということである。しかし「蜘蛛の糸」の中で人間の「善」についても、言及した。どんな悪い人でも生まれつきの「善」というものがあることを表示した。「蜘蛛の糸はカンダタにとって、自分が地獄から脱出する手段であり、芥川にとって人間たちが悪から救済される希望である。その善悪併存という観点から芥川の間人観の明るい一面が窺われるのである。」として、カンダタのしたことは誰もがやってしまう行為であることを指摘した深川 明子の「教科教育研究」によると「人間の心に潜んでいるエゴイズムを浮き彫りにする」という深い読み方がされている。<sup>9)</sup>

人それぞれの感想が生まれることで、作品に対する批評も多様になる。しかしながら、主人公のカンダタは大泥棒の悪党だが、実は罪のない蜘蛛を助けている。純粹無垢な子供であっても、相手を手伝ったり、時には無慈悲な心をもってしまうこともあるはずである。悪さをしたことで地獄に落ちてしまったカンダタに、作者は少なからず自分を重ねて見てしまうかもしれないと考える。

『蜘蛛の糸』は芥川龍之介が子供向けに書いたこともあり、子供たちに伝えたい内容であったと推測できる。「蜘蛛の糸」中で彼が、蜘蛛の糸は己のものだ、と言ったとたんに糸は切れ、再び地獄に落ちてしまう。このことから教訓を得るとすれば、「悪いことをすれば、必ず自分に返ってくる」ということだ。もしカンダタが罪人たちを手伝ったら、結果は違っていたかもしれない。そのことから自己中心的な考えはやがて身を滅ぼすこととなり、決して幸せにはなれないということが分かる。要するに、自己中心的な考えでは幸せになれないということであると思う。

生野金三(1981)『蜘蛛の糸』では、いくつかの主題を読みとることができるが一つは単純な読み方として、釈迦の慈悲心とカンダタのエゴに対する勧善懲悪や悪因悪報と述べられている。<sup>10)</sup>

芥川は『蜘蛛の糸』の中で読者に人間の持つ利己心というものの恐ろしさを示している。また、その童話のテーマは「エゴイズム」また、「慈悲と無慈悲」の象徴であるとまとめられる。

#### 3-2. エルキラーニの『命の木』

エルキラーニは想像の力を使って動物界のキャラクター内部の象徴を具現化しており、子供の読者たちを引き付けるために作中で動物たちに話しをさせ、重要な役割を担わせている。これらの象徴的なキャラクターたちは、ここでは異なる四つの役割を果たしている。それは、悪・善行・苦境とその対処・そして恩返しという名の下にある善の結果であると考えられる。

また、キラーニの作品では、そのほとんどの著作の中で顕著の役割を果たす形で、そ

の技術を用いている。この特徴は、「命の木」の中で明確に現れている。まず、そのタイトルが、生命とその重要性、目的が書かれたのを示す象徴として具現されているのである。なぜならこのタイトルは物語の内容すべてを含有しており、子供の読者を引き付けるような深い象徴的な意味を持っているからである。子供たちは作品を読むことで、物語の世界に入り込みたいと思い、その内容を見つけるのである。すなわち、木は物語において病気からユースフの母を救う方法を示す重要な象徴であり、他方では達成しそこに到達するためには最善を尽くさなければならないような尊い目標の価値を示す重要な象徴である。このイメージは、ユースフが木へ向かうことを妨げる障害の前で挫折せず、それが彼の諦めない目標であることを強調することによって、その重要性和包括性を高めていると考えられる。

### 3-3. 『蜘蛛の糸』と『命の木』の価値観の類似点と相違点

芥川龍之介とエルキラーニの童話で類似対応していると思われる点を列記してみよう。

両者とも、子供向けの童話で得られる教訓は、自分のしたことは自分に返ってくるということである。それは、良いことも悪いことも両方そうなのであるということではないだろうか。そのことによって、人に親切にしたり、助けあったりすることの大切さを改めて感じられる。また、両者は動物の世界と人間の世界を融合している点も見逃せない。

両者の童話は人生について想像をする子供たちの思考に合う観念が含まれている。彼らが社会に貢献する人物になるため、彼らの価値観を己自身の中に植え付ける役目を果たしたのではないか。作品の登場人物が少なければ、童話はより分かりやすくなり、子供の理解力に適する要因の一つになるということも共通していると考えられる。

次に芥川の『蜘蛛の糸』とエルキラーニの『命の木』の相違について述べる。芥川の童話は本作に限らず、極限状態にいる人間の心理を描き、その人間の底に潜むエゴイズム（利己心）を鋭く描き切ることで、そこから生まれるドラマの意味を読み手に委ねている。一方、エルキラーニの童話の作品では人間は勇気や自信について学ばなくてはならないという作者のメッセージが中心にあり、それを常に発信している。

イブラヒム・アブデル・ラハマーンは（2000）『理論と実践の比較文学』の中で「真の芸術的小説とは、読者の心に影響を与え、彼らの人生と動機をより良く変えるように促すために、観念と芸術的および人間的価値とのバランスをとる小説」であると述べている。<sup>11)</sup>

芥川の童話の魅力は、それが発する芸術的な刺激によるものであり、意味に深くかかわる思考的な刺激である。これは創作的な人が自分の全ての感情を注いだ瞬間の利用した結果によるものではないだろうか。生き生きとした表現と深い意味の中から生み出されるため、読者の興味を引くことが出来たと考えられる。一方、エルキラーニの童話の魅力は、彼の考えやメッセージの目標と目的を明確にした上で、広大な宇宙のすべては、意味を持ち、コミュニケーションを使って、認識し、知覚し、活動に現れてくるという信念を、子供達へ伝えているところにあると考えられる。

芥川は「地獄」、「お釈迦様」などのような観念的な世界を本当の世界のように具現化することで、読者に幅広くイメージ、象徴化させることが出来る。特に想像力から思考が始まる小さな読者にとって、そのイメージを広げさせることが魅力的だと言える。エルキラーニは



人間の世界と自然界、動物の世界を融合させ、子供の認知機能に刺激を与えさせる。文学的表現に隠された童話の目標の意味を象徴を通して子供が自分で解き明かしていくという過程の大切さを伝えているともいえる。

芥川とエルキラーニの童話の描き方には類似点も相違点もある。しかし、ラハマーンが述べているように、読者の心に長年影響を与え続けている点において、これらの童話が優れた真の芸術作品であることは間違いない。

#### 4. 結論

児童文学内の象徴、特に子供向けの物語における象徴は、子供にとって非常に魅力的な要素であり、飽くなき情熱的な方法で読むことを受け入れさせている。そして、子供はその象徴的な文章を掘り下げながら、物語の出来事に沈み込み、彼の精神的認識を拡大し、意味の背後にあるものを検索し発見する本能を彼に発達させる。

更に芥川の童話における象徴は、観念の豊かさと意味の滑らかさを与えている。そこでは象徴的なスタイルがより広く様々な方法によって、本当の世界を具現化し、読者の目にとって世界のイメージを魅力的なものにする。特に想像力から思考が始まる小さな読者にとって、そのイメージを広げさせる。

また、芥川龍之介の童話の楽しさと魅力は、それが発する芸術的な刺激からよるものであり、意味に深くかかわる思考的な刺激である。これは創作的な人が自分の全ての感情をぶつけた瞬間を利用した当然の結果からよるものであった。その結果、内容は生き生きとした記憶と深い意味を持つ海から生み出されたため、読者の興味を引くことが出来た。

一方エルキラーニが象徴を使用するとき、彼は文脈の中でこの象徴を使用して、童話の目標と目的を明確にする。これらの象徴を除いて、広大な宇宙のすべては、意味、コミュニケーション、認識、知覚、および活動に現れる象徴である。自然界と動物界、作者は生きた象徴として使うことで、彼の意見を描き、メッセージを伝えている。さらに、エルキラーニは動物の世界と人間の世界を融合した。

それゆえに象徴の要素は面白く、簡単にその目標に子供たちを引き付けるため、子供の認知機能に適している。そのため、彼の童話の中では、象徴は意味があり、道徳的な意味を持ち、子供の読者たちの心に重要な価値を与えている。

その上、エルキラーニの童話の中で象徴は重要性和役割を持っている。本物の芸術家は彼の幻視を掩護し、児童読者に刺戟を感じさせ、文学的文章に隠されたものを獲得させる。それは象徴を使って、特に動物、植物、無生物の世界における象徴的な人物を使ってでしかすることはできない。

環境は作品の執筆において重要な役割を果たしており、この役割は著者の見解、興味、成長によって異なる。これは、作品内の主要人物と中心人物の描写、および出来事を述べる方法から明らかである。環境と成長のみの影響だけでなく、著者が育った道徳的および宗教的価値も影響している。そのために芥川とエルキラーニの童話の目的と内容には様々な違いがある。芥川の『蜘蛛の糸』で人間の本性の「悪」を見抜いたということであるがエルキラー

ニの『命の木』で人間の本質の「善」を見抜いたということである。

芥川の『蜘蛛の糸』は人間の本性を「悪」の側から描いた。一方エルキラーニの『命の木』は人間の本質を「善」の側から描いたということも言えるかもしれない。芥川は、極めて不安定で頼りない「(蜘蛛の)糸」で「悪」を象徴させ、エルキラーニは、目標としての象徴を「(命の)木」で「善」として表現したということも考えられる。

童話の中で芥川龍之介とエルキラーニの込めたメッセージの違いはあるが「道徳」の面から見ても「象徴表現」の面から見ても優れており、それらが有効に作用して、今日まで大勢の子供達を含む人々に読み継がれている理由の一つであることは間違いない。

## 引用文献・参考文献

- 1 芥川龍之介『蜘蛛の糸・杜子春』（新潮社、1968.11）.
- 2 カーメル・エルキラーニ著『命の木』（ダールエルマアーレフ出版、1996）.

## 注

- 1) アブデル・タワブ・ユセーフ著『児童文学について』（文化宮殿の総局、1995）.
- 2) 滑川道夫「芥川龍之介の児童文学」（『日本文学研究ノート』45号1958.06）.
- 3) 越智良二「芥川童話の展開をめぐって」（『愛媛国文と教育』21号1989.07）  
[online] <https://books.google.co.jp/books?id=AQ5kAwAAQBAJ&pg=PA12&lpg=PA12&dq>.
- 4) 尾崎瑞恵の論「芥川龍之介の童話」（『文学』岩波書店、1970.06）.
- 5) 武藤清吾『芥川龍之介の童話』p.119、（翰林書房、2014-04）.
- 6) 片岡良一『現代児童文学論 近代童話批判』（くろしお出版、1951.06）.
- 7) 高橋龍夫 研究論文「芥川龍之介『蜘蛛の糸』の世界宮沢賢治『永訣の朝』との関連」から、pp.15-24、人文科教育学会（筑波大学出版、1997.08）.
- 8) アハマド・ザラット著『アラブの児童文学』発根と分析の研究、（ヘーパエルニールハウス出版、1998）.
- 9) 深川明子「教科教育研究」教科書の文学教材再検討の提言：芥川龍之介の作品についての検討、1968.07.
- 10) 生野金三『蜘蛛の糸』の材源をめぐって、pp.31-37、（人文科教育研究、1981.03）.
- 11) イブラヒム・アブデル・ラハマーン著『理論と実践の比較文学』（ロングマン出版、2000）.

## 謝辞

本論の執筆にあたって比較文化研究所浦田義和教授にご指導をあおいだ。記して感謝の意を表したい。